

Title	国文学と絵本・ 絵巻
Sub Title	Japanese literature and Japanese picture books
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2025
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.129, (2025. 12) ,p.192 (11)- 200 (3)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2024年度藝文学会シンポジウム「文学と絵」 開催日：2024年12月13日 対面 (慶應義塾大学三田キャンパス北館ホール) 開催
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01290001-0192

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

国文学と絵本・絵巻

石川 透

このまま、私からお話しさせていただきますが、ただ今、声がうまく出ていなくてすみません。昨日は全く声が出ていなかったのですが、だいぶ良くなったのですが、ちょっと聞きづらいところもあると思います。申し訳ありません。

私が研究してきましたのは、文学科国文学専攻でしたので、国文学の文学作品の本文を読み込むことをしていました。これは、文学科の学生・研究者の基本ですので、今でも、作品の本文を、できるならば原文で読むように、と口うるさく言っております。学生時代であるならば、自分の専門にかかわらず、いろんな種類の作品の原典を読む、ということがいちばん大切なことだと思います。

ただ、私の場合は、大学院の頃から、読み込む作品に絵が入っていることが多くありました。いわゆる、絵巻とか、奈良絵本と呼ばれる作品には、挿絵が付いているわけです。絵の方は私の専門ではありませんでしたが、ずっと見てくるとだんだんと分かってきます。本来は、絵本や絵巻の本文を読み込み、貴重な内容の場合には、翻刻して紹介することを行ってきましたが、その絵の部分も紹介する必要があると気付いてきました。そのような中で、おもしろかったことを紹介させていただきます。

実は、11月30日に、国文学研究会という、国文学専攻が中心となっている会で、発表していたのですが、その時の資料のうち、時間の都合で全く触れられなかった配付資料がありましたので、今回は、その資料を使ってお話しさせていただきます。

この資料は、東京大学国文学研究室で刊行している『國語と國文学』（2024年12月号）に掲載した「居初つな基礎的研究」という論文の一部です。一方で、

本日配布された『藝文研究』第127号(2024年12月)に「浅井了意の自筆一覧」が掲載されていますが、その一部も国文学研究会の資料として配布したのですが、その時は、浅井了意の話で終わってしまっていたのです。本日は、これらの研究が作家の研究にもなる、作家がいかにして作家となり、どのように文学作品を作ったかを明らかにする材料にもなる、ということを含めてお話しいたします。

浅井了意については、最後に一覧表があり、私はこのような一覧表が一番重要だと思っています。居初つなの方は、『国語と国文学』の最初のページと最後の一覧表のところだけをコピーいたしました。まん中の部分はお興味ありましたら、図書館にありますから、お読みいただければ幸いです。

これらの一覧表が何を意味しているかと言いますと、両方とも浅井了意なり居初つななりの自筆のものだけを集めて一覧にしたものです。この人が作った、だけではなく、作ってなおかつ自筆である、それがその人の作品の確実なものであるということになるのです。なぜそのようなことをしたかと言いますと、浅井了意については、どの作品を浅井了意が作ったのか、もちろんある程度は分かっているのですが、線引きが研究者によってバラバラなのです。それくらい難しい問題なのです。ここまで話すともた長くなってしまうのですが、基本的には、昔の人が文学作品を作っても、散文、特に物語の場合、あるいは軍記、説話の類などは、作ってもサインしなかった、署名しなかったということです。作者が署名していないので、誰の作品かが分からないというものがほとんどです。ところが、それが変わってくるのが江戸時代前期で、ちょうど浅井了意が活躍していた頃です。その頃から多少サインらしきものが出てくる。内容を作った側が署名することが出てくるということです。だから、それより前の1600年代ははじめくらい、江戸時代ははじめまでの日本の文学作品、特に散文の作品は、サインすることがなかったのです。和歌と漢文は別です。そういった状況なので、どこからどこまでがこの人の作品だという一番の決め手は、自筆のものがあるということになります。ということは、筆跡を固めないといけない。まずそこから始まっていくのですが、そこから話していると長くなってしまうので、それはまた置いておきます。

この研究においては、そもそも、どれが自筆なのか、自分の目が正しいかどうかということが問題となります。それを、どういうふうに判断するかというと、私は次のように考えています。例えば、自分でこれは浅井了意の筆跡だ、サインはないけれども、これは浅井了意の筆跡だということを仮定いたします。それと

全く同じ筆跡のもので、別の資料が出てきて、そこにサインがあれば、それはもう間違いのないことになります。もちろんそれを比べるには、一個一個の字を比べないといけないので、かなり時間のかかる作業ですが、それを繰り返しやっていると、それこそ2、3行見ただけで、これは浅井了意の筆跡だということが分かってきます。ただ、もちろん迷うものもあります。迷うものというのは、だいたい1割から2割くらい出てきますが、ある程度確実なものを並べていくことを繰り返すと、この人の筆跡が分かってくるのです。

ただ、浅井了意の場合は非常に問題で、彼は自分が創作した作品の一部を自ら版下を作るという、筆耕つまり清書係もやっていましたから、こういう問題になってくるのですが、自分で内容を作って、つまり自分で創作して、なおかつ自分で清書する作品が結構あったのです。それがあって、それまで分かっていたなかった奈良絵本・絵巻の筆耕の仕事をしていたことが明らかになったことから、彼の人生が分かってきたのです。すなわち、おそらくは、本来は豪華作品の筆耕であったのが、そこから内容を作る作家になっていった、と推測できる、という話を国文学研究会でしたのです。

一方で、居初つなという人につきましては、まずこれが居初つなの代表的な絵です。浅井了意の場合は、作家としては仮名草子の作品群を大量に作っていた人ということで知られていますが、仮名草子最大の作家、江戸時代前半だったら井原西鶴に次ぐ著名な作家です。それは間違いのないのですけれども、おそらくは、浅井了意は、絵は描かなかった。こういったもので何か作品があっても、絵と字の両方をかくということが、例えば1600年代だとほとんどないと言われていたのです。例えばこういう絵本があったとしますと、右のページが字のページ、左のページが絵のページです。この絵と字を同じ人間が担当するということを、私は少なくとも二十何年前は考えていなかったのです。こう思っていたのは私だけではなく、これらを研究する全ての人がそう思っていたと思います。こういったものは、きれいな絵本の場合は、字は書家、絵は画家が分業して作るのだ、しかも職人なので男性だ、と教わっていました。ですから、この絵本も、『鉢かづき』のさっきの絵とは違うシーンですが、鉢かづき姫をやけに可愛く描いているけれども、男の画家が描いているのだな、字は別の男性が書いているのだな、とずっと思い込んでいたわけです。

ところが、その辺の事情を、配布プリント冒頭のところに書いたのですが、

2008 年にこれとよく似た絵に気付いたのです。何の絵かと言いますと、さきほどの『鉢かづき』の絵だったのですが、こちらは『伊勢物語』の絵本です。俗に言う奈良絵本というものです。奈良絵本という言い方は良くないと言われます。それは、奈良で作られたものではないからです。そのような問題はありますが、いちおう奈良絵本という言い方をすると、奈良絵本としてこれが作られて、これとそっくりなもの、実は『伊勢物語』の嵯峨本という絵の系統のもので図柄自体は似たようなものが多いのですけれども、この奈良絵本の顔の形とか色具合とか、これとそっくりな絵を実践女子大学で 2008 年に見つけたのです。そこにはサインがありました。それが「居初氏女」というサインです。ちなみに、この一覧で言いますと、上のページの 14 ページとあるところの、下から 4 つ目、実践女子大学文芸資料研究所蔵『伊勢物語絵巻』のことです。そこに「」のカギカッコを付けましたが、このカギカッコの中は、この人の自筆の文字である、ということの意味しています。そこに「居初氏女書画」、とあります。普通だとういったものは信じない。私はこういったものがあると最初は全く信じませんでしたから、どうせでたらめだろうと思っていたのです。しかし、その実践女子大学には、これと同じ署名を持つ、『狭衣』という作品があって、本文も絵も全く同じタイプだったのです。同じ署名を持った酷似した作品が 2 つ出てきたのです。実は、私も、これと同じ署名を持つ『伊勢物語』の写本を持っていたので、3 つになりました。3 つが同じ署名を持っていて、少なくとも筆跡は全て同じだということは、これは偶然ではありえません。そこから研究が始まって、きっとこれは居初氏女という人が、これらの書も絵もかいたのだろうということになりました。

そこで、では、どういう人かということで調べていきますと、たまたまこの人の名前は、幸運なことに、珍しい名前だったのです。これが石川さんとかだと難しい。候補がいっぱい出てしまいますから。居初さんだから、「いそめ」か「いぞめ」かという問題がありますが、国文学分野だと『国書総目録』という事典がありますので、それを調べますと、その中に「居初氏女」と思われるものが出てきました。女性の名前があって、その中に居初氏女の「つな」という人がいました。その人が何者かと言うと、一覧表の 14 ページのやや上の方にあるように、版本の往来物という分野の作品を書いた人だということが分かってきました。『女今川』というのは私が研究する前まで、居初つなだということは分かつ

ておらず、別の人、窪田つなという人の作品だと考えられてきました。それは奥書に、大津住の、窪田宗保、孫、つな、と書いてあります。万葉仮名と言ったり、変体仮名とも言いますが、徒奈と表記されています。この『女今川』という名前は、江戸時代にたいへん流行していきまして、この名前を頭に付けた作品が数多くあります。その『女今川』を最初に作った人だったのですが、この人は、この記述から窪田つなと言われるようになっていたのです。往来物は、教育学分野では研究が進んでいましたが、そこでは窪田つなという名前で、居初つなとは別人として知られていました。ただ、この「大津住窪田宗保孫つな」という表現から、窪田つなという名前を推定するのは、危険があります。皆さんもお分かりのように、祖父というのはふつうは2人いますから、もしこの人が母方の祖父であった場合には、別の姓である可能性が大きいわけです。ですが、この奥書だけでは、父方か母方か分かりませんので、仮に名付けられていたものが、事典などで定着してしまったのかもしれませんが、ともかくも、『女今川』は窪田つなの作品として登録されてしまいましたが、その筆跡を見ると、居初つなの筆跡と一致してありましたし、両者ともに、大津に住んでいたと推測できましたので、同一人物ということになりました。

元々、居初つなの作品とされていた往来物については、居初氏女の署名のある奈良絵本・絵巻類と一致しましたので、この時点で、居初つな自筆の作品が多く存在し、活躍は多岐にわたることが分かりました。その時点で驚いたのは、筆耕と絵師の仕事の両方を高度なレベルで行った、女性が存在した、ということでした。それまでに、女性の署名がある絵本や絵巻が存在することは分かっていたのですが、いずれも、筆跡が一致しないなどの問題があり、基本的に、女性の署名があるものはあてにならなかったのです。

居初つなの往来物作品は、何度も何度も改題本が出版されています。同じ物を使って後に内容をちょっと変えて出版する海賊版も多く出ています。『女今川』もそうでしたが、居初つなの作品は、後の時代にも多くの影響を与えています。

このようなことがこの一覧でだいたい分かるのですが、そもそも、これだけの自筆の作品群が明らかになったのは、次のような事情もありました。ふつうであるならば、江戸時代の作者が存在しても、その自筆本が多く残されるものではありません。作者は、その内容を創作しても、写本の場合でも版本の場合でも、清書するのは別人であることが圧倒的に多いのです。それは、現代でも同じです

が、作家が文字がうまいとは限らないからです。だから、筆耕という職業が存在しているのです。

居初つなの自筆作品の研究において幸いだったのは、往来物に関する仕事をしていたことです。往来物の場合、作者が直筆で書くことが多く、教育者兼書道の先生ということが多いのです。その書道の手本を書き、それを版下にして印刷します。その過程で、版下として書かれた文字は、彫り師によって彫られるわけですが、江戸時代の彫り師の技はすさまじく、書かれたそのままを再現できます。ですから、先程私が言っていた奈良絵本の『伊勢物語』や『伊勢物語絵巻』、あるいは『鉢かづき』などの写本群と同じように、往来物の版本も、ほとんど同レベルで比較できるのです。当然ですが、写本と版本という本の形に差があっても、同筆であるならば、同じ人が書いたということになるのです。ここで、以上のことを実物でお話しいたします。

これは私が所有していた『鉢かづき』と『伊勢物語』、ちょっと珍しい『笠間長者鶴亀物語』という物語ですけれども、これも同じ字、筆跡、さらには、絵も同じタイプで、その顔はみな可愛いのです。これらの奈良絵本が全部で六点ほどあって、これらと、先ほど言いました実践女子大学で見た『伊勢物語絵巻』が、筆跡、絵柄ともに一致しているのです。さらにこちらには、居初氏女の署名のあるものがあって、これらの全ての筆跡が一致しています。また、物語ではなく、平安時代の女性歌人を中心に描いた絵巻を示しますと、小野小町の絵と和歌はこのようになります。この小野小町の絵は、縦が10cmしかなくて、すごく可愛い雛絵巻という類のものです。さらには、こういう小さい絵本、現代ならば豆本と呼ばれるような作品もあります。こんなに小さく書いているのに、筆跡は同じなのです。ただ、絵は、あまり可愛くない。小さすぎてうまく描けなかったのかもかもしれません。でも、色の塗り方とかは全く同じです。

続いて、これらが先ほどお話しした往来物です。これは『女実語教・女童子教』といった作品です。縦27センチくらいあります。ということは、一字が相当大きい。1ページあたり4行しかありませんから、文字が大きくなり、典型的な書道の手本となります。簡単に言うと、これを基に少女が文字を習うということです。で、これにも絵が付いていますが、最後に「元禄八年」、後ろから2行目に「居初氏女 つな」、と書いてあります。この刊記と本文の筆跡が、これまで見た作品群と完全に一致しますので、奈良絵本・絵巻を作っていた「居初氏女」は、往

来物を作っていた居初つなだと、分かるわけです。

この一致によって、研究が進んでいくわけですが、ただ、今見てお分かりになったかもしれませんが、版本の方は、絵が可愛くないのです。どうも、版本の絵はこういうふうを描く、というルールがあったらしいのです。奈良絵本・絵巻というのは一点一点手作りで描きますので、絵の方は特に自分でどんどん独創性が出てきて可愛くなったのではないかと考えています。

それから、往来物は版本、すなわち印刷本なので、筆跡鑑定に使えるのか、という問題があります。実は、私自身が以前は疑っていました。版本というのは、皆さんが小さい頃にやった版画と一緒にですから、何か書いた紙を、裏返しにして木の板に貼って、白いところを彫り、その板に墨を付けて紙に印刷して作ります。このように、元々あった文字は彫られてしまうわけですから、版本の文字は筆跡鑑定には使えないであろう、と考えていました。しかし、日本の彫師は、浮世絵を見れば分かるように、その技術はすごいのです。本来の文字をはほぼそのまま再現できているのです。もちろん、筆跡研究にも使えます。私は、浅井了意の筆跡を研究している段階でこれに気付き、版本も筆跡研究の対象にしていました。

その版本の例として、『女実語教・女童子教』を取り上げましたが、ここで重要なのは、元禄八年、すなわち 1695 年ですが、この最後の年号まで、同じ居初つなの筆跡であることです。この最後の年号とかの筆跡は、その前の文字と変わってしまうことがあります。筆跡が異なる場合は、後にその部分だけ変えられた可能性があるのです、その本体の一部も筆跡が変わっていることがあり、それらは、内容を改編された改題本であることも多いのですが、このような作品が、居初つなの往来物には多く、そのような改題本の年号をもって、居初つなが生きていた、とは言えないわけです。しかし、現実には、そのような作品の年号を信じてしまい、その年まで、居初は生存していた、とするような情報が多く記されているのです。

この年号とか署名というものの、全部同じ筆跡であつたら信じることができます。居初つなが自筆で書いていることを中心に、その業績や人物を考えることは、このような自筆の物を中心とした一覧表を作ることが最も重要な作業となるのです。

これは『女百人一首』です。普通の『百人一首』ではなくて、女性だけを選

んだ百人一首です。下に絵があります。最後に、署名がある部分がありますけれども、そこまで居初つなの筆跡です。だからこれは信じられます。この年号も信じられる。

こちらは、さきほど取り上げた『女今川』です。最後の部分で窪田宗保の孫、つなと書いていますが、この部分も含めて同じ筆跡なので、窪田つなというのが居初つなのことだ、ということが分かってきたということです。こういうことを繰り返していくことになります。

それから、他の資料で、この一覧にも出ていますが、お父さん、それからお母さんも、分かりました。こういうふうには、両親や祖父の名前も分かってくる。生没年はいまだに分かりません。一般の女性で生没年が分かることはほとんどないのです。お墓とされているようなものもありますけれども、それも「居初家の墓」というだけで、つなの墓かどうかは分かっていません。こういう地道な研究をして、基礎的な研究のはじめとして書きましたけれども、配付資料に書きましたように、違う親の名前がネット上や、刊行された事典にも出てきています。例えば下の段の4行目ですか、「居初四郎兵衛貞助」というふうに出てきますが、こちらは堅田の居初家本家の実在した人物ですが、居初つなの家は、おそらくは天津に出たその分家であろうと考えています。

このように、整理していくと、このようなことが起こりました。ここに出ているのは『百人一首かるた』です。これは、古書業者の方が、居初つなの作品だと推測し、豪華販売目録に掲載されました。実は、居初つなの文字や絵は、比較的容易に見分けられるのです。それだけ特徴があります。ですから、業者さんが判断したのですが、掲載されている写真を見て、私も居初つなの作品であると判断して、手に入れることにしました。かなりレベルの高い作品であることはすぐ分かりましたので、会があるたびに、皆さんに公開しておりましたら、ある時、どなたかが、カルタの裏を見せてくださいと、言ったのです。このカルタの裏は金紙が貼られているだけで、何もないと思っていたのですが、最後の取り札の裏の左下に、「居初氏廉女書画」と金紙の上に書かれていたのです。「廉」という名前は初めて見ましたが、間違いなく、居初つなの別名です。「蓮」という出家名と思われる名前を使用していますので、その文字違いの例かとも考えています。この署名が出てきたことにより、業者さんの推測、さらには、私の推測は当たっていた、ということが分かります。このことをその業者さんに話したところ、

その署名には気付かなかった、と言っていました。ともかく、われわれの居初つなの作品に対する見方は間違っていないことが分かりました。

実は、同じようなことは、浅井了意の作品においても経験しています。ちなみに、浅井了意の文字については、その判定は難しいらしく、今のところ、浅井了意の文字を見分けている人はほぼいないようです。基本的には、署名のある作品でその文字の特徴をつかみ、他の本と比較することを繰り返す、ということが重要であると思います。このような作業によって、浅井了意や居初つなの、これまで知られていなかった活動が明らかになってきたのです。それぞれの作品についても、さまざまな推測が出来るようになり、文学研究にも大いに役立つと考えています。

私は、このような研究以外では、日本の絵巻類が『ガリバー旅行記』に影響を与えている、との論も展開していますが、これについては、あくまでも仮説です。これを証明する材料が出てくることは今後almazないと思います。これは、影響を与えた『御曹子島渡』の写真ですけれども、馬人や小人の島が描かれています。こちらは、『蓬莱山』という絵巻で、いわゆる天空の島に見えてしまう絵が描かれています。これらの絵巻類が十七世紀に大量に作られていますので、その一部が長崎からオランダに運ばれたであろう、と考えていますが、これらの話も含めて、奈良絵本・絵巻の作品群は、さまざまなことを考えさせる材料となります。本当は一点一点の作品をじっくり調べると面白い研究になります。『蓬莱山』の天空の島に見える絵は、その本文には「蜃気」と書かれています。「蜃気楼」の言葉につながる「蜃気」、すなわち、二枚貝から出てくる蓬莱世界、として描いているのです。この絵巻は、浅井了意が文字を書いていますので、内容的にも浅井了意が編集した作品ではないかと考えていますが、奈良絵本・絵巻の作品群は、一つ一つの作品を研究するだけでもとてもおもしろい作品群で、解明すべきことはまだまだ多くあります。

奈良絵本・絵巻は、まだまだ埋もれている作品が数多くありますので、何か情報がある方は、ぜひお知らせください。